

書評

オルガ・ラング著

小川 修譯

中國の家族と社會(一)

内田 智雄

この書は Olga Lang, Chinese Family and Society (Yale University Press, 1946) の前半を譯出したものであり、この書の基礎資料となつているものは、K・A・ウィットフォード博士の指導のもとに行われた、一九三五年から三七七年(昭和十年―十二年)の調査結果であつて、われわれの華北農村の慣行調査開始の三年程前のものであり、わたくしにはひとしお感懐の深いものといふことができる。

なんといつてもこの書のもつ第一の特色は、家族制度の變革過程、特に近世におけるそれを、社會的政治的經濟的な視野のもとに、歴史的にとりあつかつたことにあると思われる。それといまひとつは、女史が廣汎な地域や事例に對するアンケートとともに、自らの目や足によつて實態調査を行つてゐることであつて、このことはとかく形式的概念的に把握したり理解したりする傾きのある中國の家族制度の研究に對して、獨自な領

中國の家族と社會(一)

域を開拓したものとすることができると思ふ。そしてそうした女史の實證的な調査の強味は、この書の隨所にこれを見ることのできるが、とりわけ中國の統計資料が必ずしも信憑し得ないものであることを、「一般に中國の統計は、世界でもつとも頼りにならない統計の一つである。以下引用する統計の多くは、それ自體としては正確なものであるけれども、統計的證據とするには非常に不十分なものである。にもかゝらず、それらはしばしば、きわめて明瞭に相互に相互を確認し合つてゐるのであり、觀察されたさまざまな状態に對する補足的説明として役立つてゐることは疑えないと思ふ」というあたり(八六頁)、あるいはまたいわゆる「大家族」と稱されるものの多くが、事實上は擬制的なものである事實を、「結婚した兄弟たちが一家に共に住んでもかれらは各自の財産の一部だけを共有としてゐるにすぎない。彼等は共同の厨房を使用するが、食事はめいめい別にしており、經費を共通にすることはない。形式上または實際上は分離してゐながら、ずつと一軒のなかに住んでゐるので、表面的には一家族のように見えてゐる家族も少くない」(一七四頁)、即ちこれは分家股が分家した後も、同一院子に居住することによつて、あだかもそれが一家族のような觀を呈し、従つてそれがその家族數の上からいつて、いわゆる「大家族」と目されがちであるが、事實上「大家族」なるものは極めて少ないことを指摘したものであつて、これはわが國の中國家族制度研究者が、その學問的な好奇心も手つだつて、そのみせかけに往々欺瞞されきたつたところのものであり、われわれにとつ

てまさに頂門の一針であるとともに、女史の調査研究が、中國の家族の實態をかなりな程度に把握せることを證示するものであると思われる。

また女史が中國の小説類、特に紅樓夢、金瓶梅、聊齋志異などをよく讀んでおり、そしてその家族制度に關係あるところを巧みに引證していることは注意に値する。もつとも小説の類の記述が、果してどの程度まで當時の家族制度を如實に反映しているか、従つてその資料的價値如何といふことは、かなり問題の存するところではあるが、とにかく副次的なあるいは傍證的な資料としては、われわれもこれを認めざるを得ないのであつて、その意味では女史のかゝる小説類の引證は、好個の點描的資料を供給しているし、これがまた、とかく堅苦しい感をあたえがちな中國の家族制度研究に對して、なごやかな、時には敘情的な氣分をさえこの書にあたえるのに役立つのである。つて、人間の營む生活のあり方をその對象とする家族制度の研究においては、まことにかくあるべしとの感を、いまさらの如く感ぜしめられたわけである。このことと關聯して、この書に一貫して流れる特質のひとつは、女性らしいタツチ、女性らしい觀察や考察の仕方であつて、家族制度の研究が、女性によつて擴め深められる領域の大きいことを、この書は如實に教えていると思う。他方、この書に横溢する女性らしいなごやかさは對照的に、家族制度に變貌や解體をもたらしたその社會經濟的、あるいは政治的歴史的な諸條件の分析や説明に對しては、まことに驚嘆に値するほど犀利俊敏であつて、これはまさ

しく師であり、かつてその夫君でさえあつたウィットフォード博士のよき影響によるものであると思われる。

たゞこの書に對して惜まれてならないものは、仁井田教授も既にその序文に指摘していられる如く、中國の家族を大・中・小の三つの型に分けるその類型である。女史によれば、小家族とは夫と妻と子供によつて構成されるものであり、中家族とは兩親とその未婚の子供たち及び一人の既婚の息子とその妻子とからなるものであり、大家族とは兩親・その未婚の子供・その既婚の息子たち(一人以上)と、息子たちの妻子とによつて構成されるものであつて、従つてしばしば四代から五代が同居する家族と定義されている。こゝで特に問題となるのはその「中家族」であるが、女史によれば、中家族は擴大された小家族であり、縮小された大家族であるわけで、従つて大・小家族の中核的な家族型といふことになる。しかしこの中家族と大・小家族と、家族制度上、そこにどんな本質的な差異が見出し得るであらうか。なる程現實の家族生活としては、比較的な意味において、單純なものとかやゝ複雑なものと、それよりさらに複雑なものとを區別し得るのであらうけれども、たとえば家族制度上きわめて本質的な分家の可能性の有無などを焦點としてこれを見ても、未婚の子供の成長とともに(否、事實は未婚の子供を有してなおかつ分家する事例は甚だ多いのであるが)、やはり分家の可能性は極めて多いのであつて、従つてその意味では家族生活のある時期のみを捉えて、家族の類型を分けたにすぎないということになり、なんら家族の本質的な區別ではないと

いなければならぬ。故に女史のかゝる分類の仕方は、仁井田教授とともに殆んど意味をもたないことになる。然るに女史はかゝる意味のない分類をもつて、第十二章の「家族の型と大きさ」とを決定されているため、この章に引證せられた中國各地の統計資料も、自ら殆んど台なしにする結果となつてゐる。

次に譯文について若干の感想を付記するとすれば、譯文は極めて流麗であつて、殆んど翻譯書を讀んでゐるといつた印象をうけない。まことに、譯者が中國の研究書の翻譯を克明に手がけてこられたその熟練さに敬服せられるが、たゞ注の引き方にはさらに一考を要するものがあるように思われる。たとえば論語や孟子その他の古典は、著者のよつたレッグ譯によつて、そのまゝ卷數と頁數とを示されているが、これは必要に應じて論語や孟子などの原文を引證されるときも、論語や孟子などの卷數や章節を、その原文について揭示されることが親切であるのみならず、レッグ譯の卷數や頁數のみを示すことは、われわれには殆んど意味をもたないといわなければならぬと思つ。いまひとつ、注に引かれた中國の固有名詞、特に書名や人名は、極めてポピュラーなもの以外には、例えば Po Hsing-chien 作「Li Wa-chuan」の Edwards の譯による」などとされているが、こうしたものは面倒でもその途の専門家にでもたずねて、やはり中國名になおしていただくことが必要だと思つ。然しこのことたるや、なか／＼容易なことでないことは、わたくし自らもよく知るところではあるが、かるが故にこそ却つて譯

者に期待してやまぬものがあるわけである。それからこれは實にこまかい瑕瑾ではあるが、譯文中になくもがなの「のである」がしきりに出てきて、甚だしい場合には、一頁に七・八個以上に及ぶことも珍しくはない。これは譯者の文章の推敲不十分を示すもので、單なる不注意に起因するものである。また「漢代の學者趙岐の孟子の釋義」といつた類のものも、中國の研究書を殆んど専門的に譯されているかに思われる譯者には、やはり不注意な譯語ではないであらうか。

最後に出版書肆岩波に望みたい。かつての岩波の出版書として、例えば、内容裝釘とも第一流中の一流として、わが國出版物の代表的なものとして内外に定評のあつたものであるが、近來とかくの批評のあることは、わが國のいわゆる出版文化のために惜しみてもなお餘りあることである。いまこの書に一例をとつても、活字が一般に甚だしく磨滅して、全體としてきたなくかつ不鮮明であつて、「る」と「ろ」との判讀に苦しむものがきわめて多く、校正不十分のため文字の顛倒しているものもなきにしもあらずである。印刷所を厳選限定して、校正には極めて良心的な岩波なるが故にこそ、わたくしはあえて一層の自重を切望してやまないわけである（岩波現代叢書、書價二二〇圓）